

## 『近代音楽の最高傑作を選ぶ』

伊藤美由紀（2400文字）

19世紀末から第2次世界大戦終結の1945年までの近代音楽から、10作品の傑作を選曲する。多様な国籍、スタイル、編成による作品から、次の時代の作曲家たちに甚大な影響を与えた作曲家の作品を中心に、地域別を選びたい。

最初にドイツ語圏から、オーストリアの作曲家、シェーンベルク、ベルク、ヴェーベルンの3名の作品を挙げる。彼らの初期の作品は、後期ロマン派の影響を受け、新たな視点から無調に向かい12音技法を生み出し、新ウィーン楽派と呼ばれる。

1) シェーンベルク《月に憑かれたピエロ》(1912)：初期の無調音楽であり、ソプラノにシュプレヒシュティンメの語りの奏法を含んだ7人編成の室内楽作品である。この作品の真価により、同編成の為の作品も多く、同時代、後代の作曲家達に影響を与えている。ブーレーズの《ル・マルトー・サン・メートル》にも大きな影響を与えた。(推薦CD:デイヴィッド・アサートン指揮、ロンドン・シンフォニエッタ)

2) ベルク《ヴォツェック》(1921)：ベルクは、3幕のこのオペラにより名声をあげる。ワーグナーによりオペラの頂点が築かれた後、ベルクは無調により新たな見解で論理的にオペラを構築した。(推薦CD:アバド指揮、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団)

3) ヴェーベルン《弦楽四重奏のための5楽章》(1909)：ヴェーベルンの影響は、戦後の作曲家達に濃密であり、トータル・セリエリズムに繋がる。こちらは、12音技法を取り入れる前の初期の無調作品である。個々の動機は、緻密に有機的に構成されており、コル・レーニョ、スル・ポンティチェロ、ハーモニクスなどの弦楽器の特殊奏法を巧妙に使い、強弱、テンポ全てを精細にコントロールし、効果的で繊細な音響に仕上げている。各々の楽章は短いですが、緊張感のある瞬間に、情報が凝縮されている。(推薦CD:ラサール弦楽四重奏団)

次にフランス語圏から、印象派の代表とされるドビュッシーとラヴェル、そして、印象主義の音楽の影響を受けたメシアン、ヴァレーズの4名のフランス人作曲家の作品を挙げる。印象主義の作曲家達は、機能和声を放棄し、旋法、

全音音階などを取り入れ、流動的なリズムやテンポで、木管楽器を中心に柔らかい音色や曖昧な色彩を好み、ドイツ系の作曲家のスタイルとは異なった世界観を創造した。

4) ドビュッシー《牧神の午後への前奏曲》(1894)：象徴主義詩人マラルメの『牧神の午後』からインスピレーションを得て、ドビュッシーが30歳で着手し、不朽の傑作となった出世作である。フルートの半音階による特徴的な出だしは、作品全体を通して鮮烈な印象を与える。印象主義の代表的な作品のひとつである。(推薦 CD:ブーレーズ指揮、クリーヴランド管弦楽団)

5) ラヴェル《ボレロ》(1928)：ラヴェルの晩年の傑作であり、最も有名な彼の作品のひとつでもある。イダ・ルビンシュタイン夫人の依頼により作曲されたバレエ作品である。彼は、「管弦楽の魔術師」と呼ばれるように、《ボレロ》でも、異なった楽器のソロ、組み合わせにより、単純な2つのテーマを毎回異なった音色により、聞き手を魅了させる。彼の母はバスク人であり、彼自身、スペインに近いバスク地方に生まれたこともあり、スペインの影響が反映されている作品が多々ある。《ボレロ》もその一つで、スペイン起源の舞曲である。フランス映画『愛と哀しみのボレロ』のジョルジュ・ドンによる《ボレロ》の踊りは、一見の価値がある。(推薦 CD:ブーレーズ指揮、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団)

6) ヴァレーズ《イオニザシオン》(1931)：若い頃は、ドビュッシーと親交もあり、印象主義の作曲家の影響も受けた。その後、イタリア未来派の影響を受け、打楽器を多用した作品を多数残す。こちらは、13名の打楽器奏者の為の作品で、打楽器アンサンブルの為の最初のコンサート作品である。タイトルは原子核の電離を意味し、様々な打楽器のリズム、強弱、音色により展開される。現代に向けて、多様な打楽器の使用が浸透していくことになる。(推薦 CD: ストラスブール・パーカッション・グループ)

7) メシアン《世の終わりの為の四重奏曲》(1941)：メシアンは、若い頃、ドビュッシーに傾倒し、印象派の作曲家の影響を多大に受けた。この作品は、第2次世界大戦中、ドイツ軍の捕虜となっていた頃に収容所で作曲され初演された。敬虔なカトリック信者であった彼が、旧約聖書の『ヨハネの黙示録』第10章からインスピレーションを得て作曲した8楽章からなるヴァイオリン、チェロ、クラリネット、ピアノの為の作品である。「移調の限られた旋法」、「不可逆リズム」、「鳥の歌」などの彼独自の音楽語法を使用している。(推薦 CD:

Tashi・タッシ)

最後に中東欧地域の作曲家2名の作品を挙げる。

- 8) ストラヴィンスキー《春の祭典》(1913) : ディアギレフの委嘱によりロシア・バレエ団の為に作曲した、ロシア人作曲家ストラヴィンスキー初期の3大バレエ作品の最後の5管編成による大作である。原始主義のスタイルで、複調、変拍子、強烈なリズム、不規則なアクセントなど、異国的な素材による原色的な音色を特徴とした独自の音楽観に基づく。後代の作曲家に絶大な影響を与える。(推薦CD : ブーレーズ指揮、クリーヴランド管弦楽団)
- 9) ストラヴィンスキー《プルチネラ》(1920) : こちらも、ロシア・バレエ団の為に作曲した作品で、新古典主義のスタイルで書かれた小編成である。18世紀イタリアのペルゴレージの音楽を素材に、彼特有のリズム、和声に作り替えられている。初演は、ピカソによるキュビズム風の衣装舞台セットでデザインされた。(推薦CD : ブーレーズ指揮、アンサンブル・アンテルコンタンポラン)
- 10) バルトーク《ピアノ協奏曲第1番》(1926) : バルトークは、ハンガリーの作曲家、ピアニスト、民俗音楽学者である。自らピアニストでもある為にピアノ作品も多く、この作品はストラヴィンスキーの影響を受けており、ピアノが打楽器的に扱われて、独特なリズムと不協和音による新古典主義の作品である。(推薦CD : アバド指揮、シカゴ交響楽団、ポリニー)

後期ロマン派以降、作曲家が調性というシステムの枠のなかで個性を発揮しようと模索した時代は終わり、新たな独自の音楽語法の探求の時代に入っていたのが近代音楽である。